

犬になりたい。

しんばし

「じゃあ」

と足元から甘えた声がする。

大学の授業を終えて帰宅すると、なぜか部屋に猫がいた。

その身体はまだ小さく、手足も太くて短い。見る限り階段の昇り降りさえ覚束なさそうだし、そもそも不在時には施錠しているこの部屋に入れるわけがない。となれば、同居人のメリーが拾ってきたというのが一番現実味がある仮説である。本人に確認しようとして電話してみたが、発信して数秒後にメリーの机の上にある携帯電話の着信音が部屋に響いた。手に取って確かめてみると、画面に「着信 宇佐見蓮子」と表示されている。

携帯電話も置きっぱなしで彼女は何処に行ってしまったのか。子猫を拾って、部屋に連れてきて、そのままふらふらと外に行ってしまったのだろうか。夕食の買い物かそれとも他の野暮用か。

メリーと連絡をとることを諦め、携帯電話をベッドに放り出してクッションに座ると、待ち構えていたように子猫

が私の身体を上ってくる。手をそっと近づけると、目を細めて頭をすりつけてくる。両手で慎重に包み子猫を抱え上げて様子を観察する。まず首輪はない。外傷は特になさそうで、悪質な悪戯を受けた形跡もない。病気かどうかは判然としないが、挙動がおかしいわけでもないの、五体満足健康な子猫なのだろう。そう信じておく。

淡い茶色の毛に覆われた体躯は私の両手で包めば頭以外すべて隠れてしまうほどに小さい。大きな琥珀色の目はくりくりしていて表情豊かで、細い尻尾も感情に合わせているのかゆらゆらと動く。こちらの気を引くように鳴く声は猫というよりも、玩具のぬいぐるみを押した時に出るような音である。

指先で子猫の身体をついてみると、くすぐったそうに身を震わせる。空いている右手でパソコンの電源を入れてパスワードを入力、立ち上がるのを待つ。

子猫の様子を伺うと、その小さな口を一杯大きく開いて私の指をくわえようとしていた。前足をひっかけて甘噛みをする様はかわいらしい。私はこれまでの人生で猫と接する機会が皆無であったから、こうやって近付いて触れて撫で回すという状況は初めてだが、これはなかなかいいものだ。下腹部と太ももの温かさと適度な重みに自然と頬も気も緩み、鼻歌を歌いだす始末である。